

## 教職演習Ⅱ 授業報告

### 自主勉強時間を増やす試みとそれに影響する要因

星川佳広\*

#### 1 本報告の背景と目的

教職演習Ⅰ～Ⅵは、スポーツ教育コースの学生を中心対象とする教員採用試験（以下、教採）対策の演習科目である。今回報告するのは、私が担当した2年次春学期の教職演習Ⅱについてであり、Ⅰ～Ⅵある教職演習の中では一般教養問題対策として位置づけられている。

私は本学へ赴任した5年前、他2名の教員と本授業を2年間担当した。しかし、私の持ちコマ数や所属コース異動等の関係で担当を外れ、今回は3年ぶりの担当となった。この間、本授業を履修する学生が減少したこともあり、今回は私のみでの担当であった。

前回担当した経験により、本学部生の一般教養の学力レベルやその格差についてはおおよそ把握できていた。前回私が担当した学年(W111生、S112生)で、一般教養が出題される教採一次(保健体育科中高)の合格者は、結果的に7名、11名しかなかった。私の把握する学力レベルに鑑み、この低い合格率の大きな原因は一般教養問題が解けなかったためと推測する。

一方、教採一次の一般教養の問題難易度は、各都道府県で傾向は異なるものの、平均的には高校入試レベルである。すなわち、義務教育内で扱う中学生レベルの問題であり、時間さえかければ誰でも理解できるはずである。保健体育科といえども教員になるためには最低限の学力レベルといえよう。本学部生の多くが解けない理由は、時間をかけて勉強した経験がないからであろう。

そこで今回の教職演習Ⅱの担当に当たっては、絶対的な勉強量の増加を強く意識した。本報告では、教職演習Ⅱの授業報告を行うとともに、授業内の小テスト(確認テスト)や定期試験の結果、アンケートおよびノートチェック等の情報にもとづき、まずは本学部生の自主的な勉強の実態(実施状況、時間、やり方等)を整理する。さらには、自主的な勉強時間に影響するであろう要因を検討する。これらを通し、本学部生の自主的な勉強時間を増やし、学力向上につなげることを目的とする。

以下の構成は、授業方針および内容(第2節)、アンケート(第3節)、履修学生の特性(第4節)、各テスト結果と自主的な勉強時間の推移(第5節)、自主的な勉強時間へ影響する要因(第6節)、ノートチェック(第7節)、考察および所感(第8節)である。

#### 2 授業方針および内容

授業の割り当ては火曜5時限であった。シラバスは図1のとおりであった。シラバス内には、絶対的な勉強量の確保、学習効果促進のための予習、復習の徹底をあえて銘記し、それ自体を授業の大きな目標の一つとした。自主勉強時間の必要性については、各週にわたってしつこく訴えた。

\* 東海学園大学スポーツ健康科学部准教授

|            |  |     |     |    |   |
|------------|--|-----|-----|----|---|
| 科目名        | 教職演習Ⅱ  | 単位数 | 1.0 | 学年 | 2 |
| 担当者氏名      | 星川 佳広  |     |     |    |   |
| 授業概要       | 教員採用試験(一次)で扱われる一般教養の過去問を解き、理解を深めることで、一般教養の知識増加を図るとともに、採用試験に出題される問題の傾向と対策を研究・実践する。本学部に不足する絶対的な勉強量を確保し、教師になった場合に求められる向上心や勉強の学習方法を身につける。それらの教育効果の向上のために定期的に知識習得の現状をチェックする。  |     |     |    |   |
| 到達目標       | (1)一般教養を学習しつつ、模擬試験などで自身の知識習得状況を把握し、各自の教員採用試験に向けた積極的対策・姿勢を構築することができる。<br>(2)保健体育教諭としての倫理観・使命感・責任感を身につけ、自分を律して行動し、何事にも誠実に精一杯の力で取り組むことができる。また、互いに教え合い、協力し合って学習を進めることができる  |     |     |    |   |
| 授業計画       | 1週 オリエンテーション(教職演習Ⅱの概要、目標)、過去問テスト<br>[予習・復習 1週]過去問テスト<br>2週 一般教養(英語・数学)の傾向と対策 1<br>3週 一般教養(英語・数学)の傾向と対策 2<br>4週 一般教養(英語・数学)の傾向と対策 3<br>[予習・復習 2-4週] 指定課題<br>5週 第1回確認テスト<br>[予習・復習 5週] 確認テスト<br>6週 一般教養(それ以外の教科)の傾向と対策 1<br>7週 一般教養(それ以外の教科)の傾向と対策 2<br>[予習・復習 6-7週] 指定課題<br>8週 第2回確認テスト<br>[予習・復習 8週] 確認テスト<br>9週 東海地区(愛知、名古屋、三重)の一般教養の傾向と対策 1<br>10週 東海地区(愛知、名古屋、三重)の一般教養の傾向と対策 2<br>11週 東海地区(愛知、名古屋、三重)の一般教養の傾向と対策 3<br>[予習・復習 9-11週] 教科書内東海地区の過去問<br>12週 第3回確認テスト<br>[予習・復習 12週] 確認テスト<br>13週 関東地区(静岡、神奈川、埼玉など)の一般教養の傾向と対策<br>14週 関西地区(大阪、京都、滋賀など)の一般教養の傾向と対策<br>[予習・復習 13-14週] 教科書内関東地区、関西地区の過去問<br>15週 第4回確認テスト<br>[予習・復習 15週] 確認テスト |     |     |    |   |
| 授業方法       | 各都道府県の教員採用試験の過去問を解くことで一般教養の絶対的な知識量を増やす。演習前半は各教科ごとに、後半は都道府県別に問題を解く。予習・復習を徹底し、教員採用試験に向けて各自の勉強に対する積極的姿勢の確立を行う。予習課題は学生が発表、説明を行う(プレゼンテーション)   |     |     |    |   |
| 履修上の留意事項   | [準備・予習] 毎回、指定された問題を各自で解いたうえで授業に参加すること。また、1年次の「教職演習Ⅰ」で使用した一般教養問題の復習をしておくこと。<br>[復習]授業内で扱った問題を繰り返し解き、自らが解説できるレベルまで理解を深めること。また、教科書、参考書内の他府県の似た問題を解くことで、応用力を高めること。   |     |     |    |   |
| 教科書        | 『一般教養の過去問 2017』(時事通信出版局)   |     |     |    |   |
| 参考図書・参考URL | 一般教養の過去問 2016(時事通信出版局)<br>一般教養の演習問題 2017(時事通信出版局)など  |     |     |    |   |
| 評価の方法・評価基準 | 定期試験(50%)、確認テスト(35%)、教職志願者としての受講態度(15%)から総合的に評価する。   |     |     |    |   |

図 1 シラバス

## 2. 1 第 1 週目

自主的な勉強を学生に意識付けるため、第 1 週目の授業において、

- 4 回の確認テストを実施すること(実際には 3 回になった)
  - 授業内課題を配布し、予習課題として指示(図 2)
  - 予習、自主勉強用の A4 サイズ大学ノートの配布
  - 出席記録を兼ねて毎回ノートへ押印すること
  - 確認テストごとにノート提出(ノートチェック)し、その内容を評価に含めること
- 等を強調して説明した。

また第 1 週目には、学生の意識付けを図ることを目的(評価には含めない)に、愛知県、名古屋市の昨年度の教採問題を抜粋し、事前テストを実施した。テスト実施後のコメント欄には、多くの学生がより一層の勉強が必要であることを記載していた。

第 1 週目には参加したが、上記の説明、事前テストを通して履修を辞退した学生が 9 名おり、結果

的に 44 名が履修登録した。したがって、履修生は自主勉強の実施を了解した学生、あるいはその意識が高い学生であったと言えよう。その後、欠席超過で失格した学生は 1 名のみであった。

## 2.2 授業展開

授業展開は、2 もしくは 3 週の授業を行ったら、その間の授業内容について確認テストを実施するというサイクルであった。事前にはこのサイクルを 4 回まわすことを想定していたが、実際には学習到達状況の遅れから、確認テストは 3 回になった。

- 第 1 サイクル 2 - 4 週目 (英語、数学) + 5 週目 (第 1 回確認テスト)
- 第 2 サイクル 6 - 8 週目 (数学残り、理科、社会、時事問題、その他) + 9 週目 (第 2 回確認テスト)
- 第 3 サイクル 10 - 12 週目 (名古屋、愛知、三重の教採過去問 2 年分) + 13 週目 (第 3 回確認テスト)
- 第 4 サイクル 14 - 15 週目 (神奈川、滋賀の教採過去問 2 年分)

第 1、2 サイクルでは、教採の過去問から抽出して準備した授業内課題 (図 2) と教職演習 I で学習済みの「一般教養の演習問題 (2017 年度版)、時事通信出版局」内の問題に関して、解答および解説を行った。

第 3、4 サイクルでは、教科書指定した「一般教養の過去問 (2017 年度版)、時事通信出版局」および教材フォルダ教職センター内にある教採過去問に関して、解答および解説を行った。

解答、解説時には、時間がある限り学生を指名し、解答例を板書、口頭で行わせた。前週に担当問題を指名しておいた場合には、学生はほぼ 100% で正答を回答した。

各サイクル後には、ノートを提出させて、予習の実施状況のチェックを行った。チェックしたノートはコメントを含めて 3 日以内に返却した。

## 2.3 確認テストおよび定期試験

確認テストおよび定期試験は、以下の概要で行った。

|            |         |                           |
|------------|---------|---------------------------|
| 事前テスト      | 第 1 週目  | 名古屋市、愛知県の過去問の抜粋           |
| 第 1 回確認テスト | 第 5 週目  | 英語、数学                     |
| 第 2 回確認テスト | 第 9 週目  | 数学一部、理科、社会、時事             |
| 第 3 回確認テスト | 第 13 週目 | 名古屋市、愛知県、三重県の過去 2 年間分の過去問 |
| 定期試験       |         | 授業で扱ったすべての内容              |

確認テストおよび定期試験の問題は、授業で扱った問題そのものを中心としたが、学生の記憶による回答を避けるため、問題の一部を部分的に修正して出題した。また、授業内課題と類似した教科書、参考書内の問題も加えて利用した。

確認テスト翌週には、学生各自に採点結果と各設問の正答率を返却 (図 3) し、正答率が低い問題を中心に再度の解説を行った。

# 英語

## I. 対話文・作文

### 問題-1. 愛知県 2012

次はAとBの会話である。(a)～(c)内に当てはまる最も適切なものを語群から選ぶとき、正しい組合せとなるものを解答群から一つ選び、番号で答えよ。

A: "I'm going to go to the city hall tomorrow. (a) is it from the nearest station?"

B: "It is about two miles."

A: "Oh, it's a long distance. (b) does it take to walk?"

B: "Well, about forty-five minutes. (c) taking a bus?"

A: "That Sound good. Where is the bus stop?"

B: "There is a bus terminal in front of the Station. Take City Bus No.15."

A: "Thank you so much."

B: "My pleasure."

【語群】 ア How far            イ How much            ウ How many times  
          エ How long            オ How come            カ How about

【解答群】 1 a-ア b-ウ c-オ            2 a-ア b-ウ c-カ  
          3 a-ア b-エ c-オ            4 a-ア b-エ c-カ  
          5 a-イ b-ウ c-オ            6 a-イ b-ウ c-カ  
          7 a-イ b-エ c-オ            8 a-イ b-エ c-カ

### 問題-2. 兵庫 2013

次の英会話を完成させるのに最も適切なものを次の1～4からそれぞれ1つ選びなさい。

問1 A: Is it possible to pick me up at the airport when I arrive in Japan?

B: Yes. Please call me when you arrive at the airport.

A: Good,

- 1 You are wanted on the phone.
- 2 Hang up and try again, please.
- 3 Call me to pick you up.
- 4 I'm looking forward to seeing you.

図 2 予習課題例

S115●●●

●● ●●様

合計 15

採点 15/20

普段の勉強時間 0 時間

昨日の勉強時間 1 時間

| Q  | あなたの回答 | 正答 | 採点 | 正答率(%) |
|----|--------|----|----|--------|
| 1  | 6      | 6  | 2  | 48.8   |
| 2  | 1      | 3  | 0  | 36.6   |
| 3  | 6      | 6  | 1  | 61.0   |
| 4  | 5      | 5  | 1  | 80.5   |
| 5  | 1      | 1  | 1  | 41.5   |
| 6  | 3      | 3  | 2  | 63.4   |
| 7  | 2      | 2  | 1  | 56.1   |
| 8  | 3      | 3  | 1  | 68.3   |
| 9  | 5      | 5  | 1  | 68.3   |
| 10 | 4      | 5  | 0  | 53.7   |
| 11 | 4      | 4  | 1  | 85.4   |
| 12 | 6      | 6  | 1  | 56.1   |
| 13 | 3      | 5  | 0  | 80.5   |
| 14 | 4      | 4  | 1  | 70.7   |
| 15 | 3      | 3  | 1  | 41.5   |
| 16 | 2      | 2  | 1  | 53.7   |
| 17 | 2      | 4  | 0  | 29.3   |
| 18 | 2      | 3  | 0  | 56.1   |

図 3 確認テスト結果の返却例

### 3 アンケート

確認テストおよび定期試験時にはその前 1 週間において一般教養に関して 1 日あたり平均的に何時間の自主的な勉強を実施したか（日常的な勉強時間）についてと、テスト前日にどれくらい勉強を実施したか（テスト前日の勉強時間）について調査した。

また、第 13 週目に自主勉強に影響するであろう要因に関するアンケート調査を実施した（図 4）。取り上げた項目は、本人の意識（教員になる意思や自信、学力レベルの自己判断、勉強の必要性の認識、問題難易度の感覚）、高校時の家庭学習状況、入試種別と出身高校ランク、および自主的な勉強時間を増やせない理由であった。

なおアンケートの設問設定には、三宅<sup>1)</sup>を参考にした。

平成 28 年 7 月 5 日

教職演習Ⅱ 自主的な勉強時間に関するアンケート

担当 星川佳広

このアンケートは、スポーツ健康科学部生の自主的な学習、勉強に対する現状を把握し、①自主学習への意欲を高め、②最終的には本学部生の教員採用試験合格率为高めることを目的とするものです。  
アンケート結果は随時刊行し、スポーツ健康科学部教育研究誌にて発表する予定です。ただし、個々の回答が、氏名が特定される形式で開示されることはありません。また、個々の回答内容が、本アンケート集計以外の目的で利用されることはありません。ご協力がほどよろしくお願ひします。

回答者 学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

1. 昨週の日あたりの平均的な自主的な勉強時間を教えてください。 ( ) 分  
2. 昨日の自主的な勉強時間を教えてください。 ( ) 分  
3. 1,2の勉強時間を、自分自身でどう評価していますか。自由に記述してください。  
(例 よくやっている。もっとやらなければいけない。など) \_\_\_\_\_

4. 自主的な勉強時間を増やせない(増やさない)理由としてあてはまるものに丸をつけてください(複数可)。  
①今の勉強時間が十分と考えているから ②勉強の仕方がよくわからないから  
③自分自身のやる気・意欲が低いから  
④忙しくて時間が足りないから 下記の具体的な理由に○をつけてください(複数可)  
・他の授業の予習復習やレポート ・アルバイト  
・部活動・サークル活動 ・遠方からの通学に時間がかかる  
・遊び、友人との交流 ・家事、家の都合  
⑤その他 ( )

5. 教職演習Ⅱの授業において教員採用試験一般入試の過去問を解いてきました。過去問に取り組んでみて問題の難易度をどのように感じていますか? 近いものに丸をつけてください。  
①非常に難しい。自分の学力レベルを超えた問題が多量にある。  
②難しい問題が多いが、自分で解ける問題もいくつかある。  
③難しい問題と簡単な問題が半々である。自分の学力レベルにちょうど良い。  
④難しい問題もいくつかあるが、多くの問題は簡単でだいたい解ける。  
⑤多くの問題が簡単である。

6. 教員採用試験に合格するために、あなたは自主的な勉強(授業以外の勉強時間)の必要性をどのように感じていますか? あなたの考えに近いものに丸をつけてください。  
①自主的な勉強がもっと必要だと感じている。  
②自主的な勉強の必要性は感じるが、今はまだやらなくてよい(上級生になったら取り組む)  
③自主的な勉強の必要性をあまり感じない。  
④どちらともいえない。よくわからない。

7. あなたはどの程度、保健体育科教員あるいは小学校教員になりたいと考えていますか? 近いものに丸をつけてください。  
① 心底からどうしても先生になりたいと思っている。  
② できれば先生になりたいと思っている。  
③ 心願はあるが、やれるところまでやってみたい。  
④ 先生になることは、今はあきらめている(or あきらめた)。

8. 一般的な大学生の学力レベルを、上から A, B, C, D, E と 20%ずつに 5 分割すると、教員採用試験の受験者の多くは「B から C の上レベル」です。一方、スポーツ健康科学部の学生の学力レベルは「C から E が中心で、B はわずか、A は多分ない」と言う状況です。あなたは、自分の現在の学力レベルがどこに位置すると自己判断していますか? 近いものに丸つけてください。  
①A ②B ③C ④D ⑤E

9. 教員採用試験のときまでは「B から C の上レベル」まで、自分の学力レベルを上げられると考えていますか? あなたの現在の考えに近いものに丸つけてください。  
① そのつもりでやっているのだから、当然自信はある。  
② 自信と心配が半々と言うのが実状だ。  
③ 多分難しい。しかしやれるところまでやってみたい。  
④ 無理だと思う。あきらめている。

10. あなたの出身高校名を記してください ( )

11. 高校時の家庭学習や自主的な勉強習慣はどうでしたか? 高校時の家庭学習時間について近いものに丸つけてください。  
①ほぼ毎日やっていた ②2-3日に1回程度やっていた ③週に1回程度やっていた  
④テスト前のみやっていた ⑤ほとんどしてなかった

12. あなたの東海学園大学への受験種別に丸をつけてください。  
①AO入試 ②指定校推薦入試 ③スポーツ推薦I種・II種  
④公募推薦入試 ⑤一般入試 ⑥センター試験利用入試  
⑦その他

ご協力、ありがとうございました。

図 4 アンケート調査用紙

## 4 履修生の特性

ここでは次節以降の分析を解釈する上で前提となる履修生の特性を整理する。

- 男子 33 名、女子 10 名の合計 43 名。(履修 44 名に対して失格者 1 名)
- 入試種別

|          | AO 入試     | 指定校推薦     | スポーツ推薦    | 公募推薦      | 一般入試       | センター利用   |
|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|----------|
| 人数(名)(%) | 5 (11.7%) | 9 (21.0%) | 6 (14.0%) | 9 (21.0%) | 10 (23.3%) | 4 (9.4%) |

スポーツ健康科学部の S115 生における入試種別の分布は、AO 入試、指定校推薦、スポーツ推薦、公募推薦、一般入試、センター利用それぞれで、8、24、21、19、25、5%である<sup>2)</sup>ので、履修生のそれは、S115 生全体と比較し、スポーツ推薦が若干少なく、センター利用が若干多い他はほぼ同様であった。

- 出身高校ランク

|          | A 2      | B 1        | C 1        | C 2        | C 3       | D 1      | E 1      |
|----------|----------|------------|------------|------------|-----------|----------|----------|
| 人数(名)(%) | 1 (2.3%) | 10 (23.3%) | 10 (23.3%) | 10 (23.3%) | 9 (20.9%) | 2 (4.7%) | 1 (2.3%) |

スポーツ健康科学部の S115 生における出身校高ランクは、A 2、B 1、C 1、C 2、C 3、D 1、E 1 それぞれで 2、14、20、26、24、9、5%である<sup>2)</sup>ので、履修生のそれは、S115 生全体と比較し、B 1 が若干多く、D 1、E 1 が若干少ないほかはほぼ同様であった。

## ● 高校時の家庭学習状況

|          | ほぼ毎日やっていた | 2-3日に1回程度やっていた | 週に1回程度やっていた | テスト前のみやっていた | ほとんどしていなかった |
|----------|-----------|----------------|-------------|-------------|-------------|
| 人数(名)(%) | 8(18.6%)  | 10(23.3%)      | 3(7.0%)     | 16(37.2%)   | 6(14.0%)    |

最頻は“テスト前だけやった”(37.2%)であったが、毎日実施していた者も18.6%いた。

## ● 教員になる意思

|          | 心底からどうしても先生になりたいと思っている。 | できれば先生になりたいと思っている。 | 心配はあるが、やれるところまでやってみたい | 先生になることは、半ばあきらめている |
|----------|-------------------------|--------------------|-----------------------|--------------------|
| 人数(名)(%) | 20(46.5%)               | 9(20.9%)           | 14(32.6%)             | 0                  |

約半数(46.5%)は教職希望を強く持っており、「できればなりたい」も含めれば教職希望の強い学生が履修していたと考えられる。この度数分布は、5年前の三宅<sup>1)</sup>の報告とほぼ同じであった。

## ● 教員への自信、学力レベルの今後の見通し

|          | そのつもりでやっているのだから、当然自信はある | 自信と心配が半々と言っているのが実状だ | 多分難しい。しかしやれるところまでやってみたい | 無理だと思う。あきらめている | NA      |
|----------|-------------------------|---------------------|-------------------------|----------------|---------|
| 人数(名)(%) | 2(4.7%)                 | 24(55.8%)           | 14(32.6%)               | 1(2.3%)        | 2(4.7%) |

自信がある者は2名のみで、55.8%は不安と自信が共存している状況であった。“多分難しい”と感じている者が約1/3であった。

## ● 学力レベルの自己判断

|          | Aランク | Bランク | Cランク     | Dランク      | Eランク     |
|----------|------|------|----------|-----------|----------|
| 人数(名)(%) | 0    | 0    | 9(20.9%) | 27(62.8%) | 7(16.3%) |

自己の学力レベルを高い(A,Bランク)と判断している者は皆無であった。大半(62.8%)はDランクと判断していたが、一方で、自分を最低レベル(Eランク)と考える者も少なかった(16.3%)。

## ● 勉強の必要性の認識

|          | 自主的な勉強がもっと必要だと感じている | 自主的な勉強の必要性は感じるが、今はまだやらなくてよい(上級生になったら取り組む) | 自主的な勉強の必要性をあまり感じない | どちらともいえない。よくわからない |
|----------|---------------------|---|--------------------|-------------------|
| 人数(名)(%) | 37(86.0%)           | 6(14.0%)                                  | 0                  | 0                 |

ほぼ全員が勉強の必要性を強く認識していた。後からやればよい(上級生になってから取り組む)と考える者はわずか(14.0%)であった。

## ● 教採問題の難易度の感覚

|          | 非常に難しい。自分の学力レベルを超えた問題がほとんどである | 難しい問題が多いが、自分で解ける問題もいくつかある | 難しい問題と簡単な問題が半々である。自分の学力レベルにちょうど良い | 難しい問題もいくつかあるが、多くの問題は簡単でだいたい解ける | 多くの問題が簡単である |
|----------|-------------------------------|---------------------------|-----------------------------------|--------------------------------|-------------|
| 人数(名)(%) | 9(20.9%)                      | 25(58.1%)                 | 9(20.9%)                          | 0                              | 0           |

問題を簡単と考える者は皆無であった。難しいと考える者が約8割で、難しい問題と簡単な問題が半々とする者が約2割であった。

## 5 各テスト結果と自主的な勉強時間の推移

ここでは本報告の主目的である勉強時間の実態把握とそのテスト結果との関係性についてまとめる。

### 5.1 テスト結果

図5に事前テスト、各確認テスト、定期試験における得点（各テストで満点が異なるため百分率で表示）の推移を示した。必ずしも上位のものが上位に位置続けるわけではなかった。一方で、下位の学生は下位であり続ける傾向にあった。

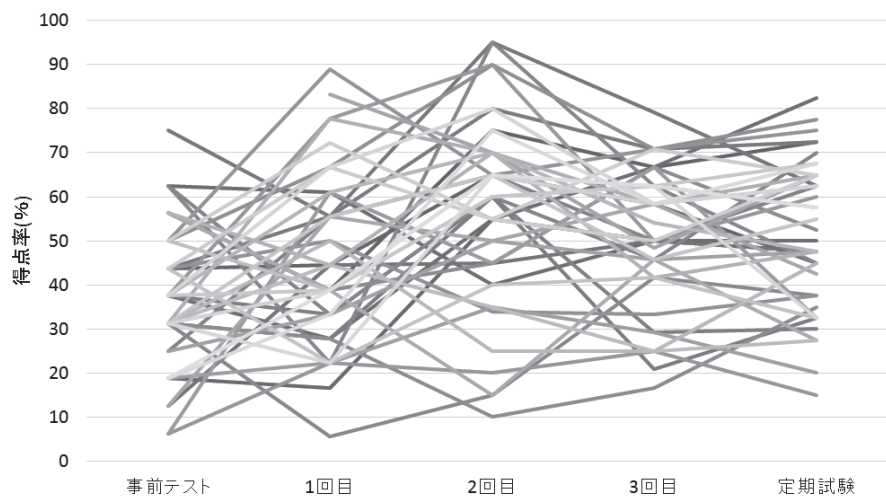


図5 各テストにおける得点率の推移

各ラインは個々の学生をあらわす

図6に、事前テストと定期試験の得点率の相関関係を示した。両者には非常に弱い相関 ( $r=0.366$ ) がみられており、本授業にかかわらず元々の学力が相対的に高い学生が定期試験でも良い得点をとった様相が確認できた。一方で両者の相関は強くなく、授業や学生の取り組み次第で一般教養の学力向上が図れるとも考えられる。

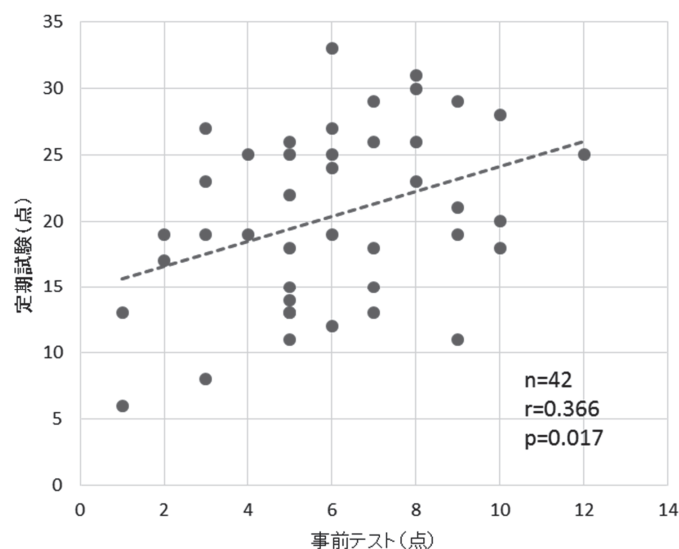


図6 事前テストと定期試験得点率の関係

事前テスト、定期試験ともに受けた学生は42名であった



### 5. 2 自主的な勉強時間

図 7 に自主的な勉強時間を示した。日常的な勉強時間（履修生全体の平均）は、第 1 回から第 3 回へと確認テストごとに徐々に増えたものの、履修生全体の平均では 0.5 時間（30 分）程度でしかなかった。また、定期試験前においても日常的な勉強時間は 1 時間に満たなかった。

テスト前日の勉強時間は、確認テスト前では約 1 時間であり、定期試験前では 2 時間弱であった。

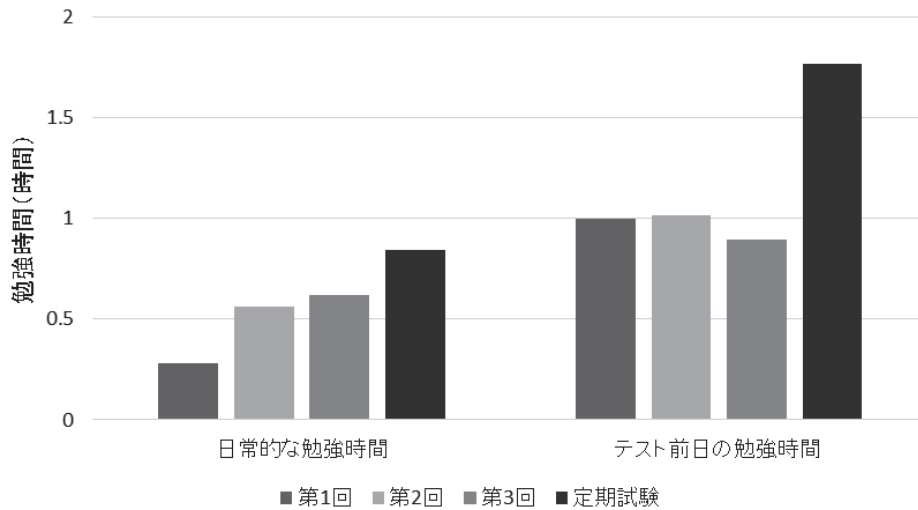


図 7 勉強時間の履修生平均

図 8 には、図 7 の内訳を詳細にするため、勉強実施時間が、0 時間、30 分以内、30 分～ 1 時間以内、1 ～ 2 時間以内・・・の該当人数の推移を示した。第 1 回確認テスト時点では、日常的な勉強時間は 32 名（約 70%）が 0 時間であり、まったく勉強をしていなかった。このまったく勉強しない群は確認テストごとに減少したものの、定期試験前にも 5 名存在した。また、定期試験前においても約半数は日常的な勉強時間が 30 分以内であり、1 時間を超えて勉強する学生は 6 名にしかならなかった。

一方テスト前日の勉強時間は、確認テスト時には約 7 割が 1 時間以内か 0 時間で、残り 3 割が 1 時間を超えて勉強していた。定期試験前にはこの割合が逆転し、約 7 割が 1 時間を越えて勉強し、残り 3 割は 1 時間以内の勉強であった。

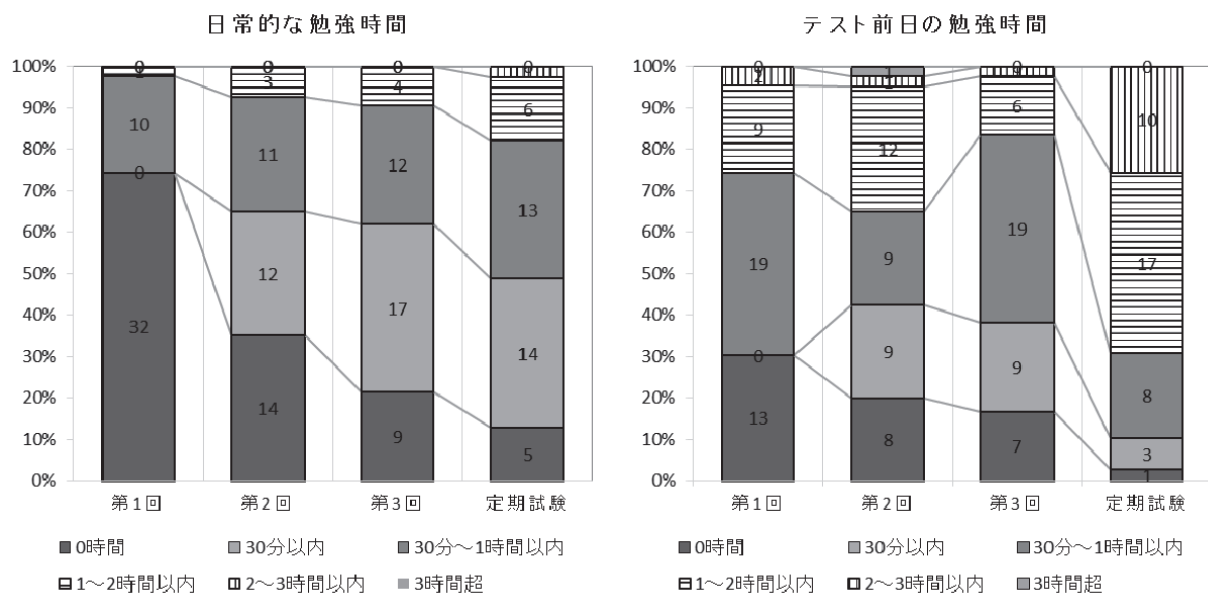


図 8 日常的な勉強時間 (左) とテスト前日の勉強時間 (右) の人数

棒グラフ内の数字は人数。第 1 回において 30 分以内が 0 となっているのは、その選択肢がなかったためであり、30 分～ 1 時間以内に組み込まれている。

### 5.3 勉強時間とテスト結果の関係性

各テストにおける得点率と、日常的な勉強時間およびテスト前日の勉強時間の相関関係は、相関係数にして前者が0.1～0.3、後者が0.3～0.4であった。両者ともに相関係数は低いものの、各テストへの効果は日常的な勉強時間よりも、前日の勉強時間の方がわずかに関係性が強かった。

第1回確認テスト時には70%超が日常的には勉強をまったくしていなかったもので、これを除外した上で、第2回確認テスト以降の日常的な勉強時間とテスト前日の勉強時間を平均した総合的な1日あたりの勉強時間を、その学生の総合的な勉強時間として算出した。そして、総合的な勉強時間と定期試験結果との関係性を図9に示した。

両者には $r=0.34$ の低い相関関係がみられた。また、総合的な勉強時間が最も高かった学生（2時間）が定期試験において最も高い得点率(82.5%)を示していた。一方で、まったく自主勉強しなかったもの（0時間）においても50%の得点率が取られていた。

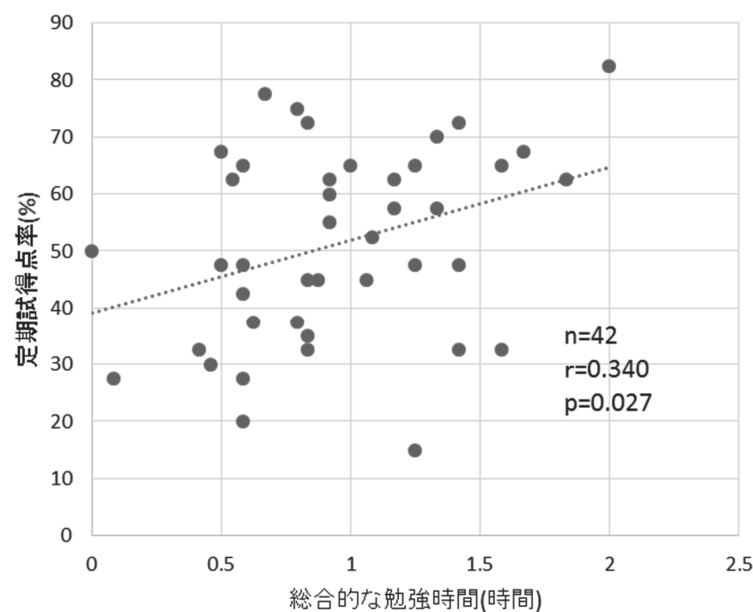


図9 総合的な勉強時間と定期試験得点率との関係

すべてのデータがそろった学生は42名であった。

## 6 自主的な勉強時間へ影響する要因

ここではアンケート調査に基づき、自主的な勉強時間へ影響する要因を整理する。自主的な勉強時間としては、図9で算出した総合的な勉強時間を利用した。

しかし、勉強時間の偏り（半数が1時間以内であることや最大でも2時間でしかないことなど）やアンケート調査結果の偏り（ほぼ全員がもっと勉強しなければならないと考えていることなど）が存在したことから、分析においては、アンケート各設問に対する回答種別の総合的な勉強時間の平均値を示すとともに、履修生のなかで総合的な勉強時間が多かった10名を抽出し、この10名がどのようにアンケート各設問に回答したか（勉強時間上位10名の分布）の2つの観点でまとめた。

結果的に、出身高校ランク、入試種別、教員になる意思等では、アンケートの回答種別に総合的な勉強時間の特徴・傾向は見受けられなかった。以下では、わずかながらの特徴・傾向がみられた、教採問題の難易度の感覚、高校時の家庭学習状況、学力レベルの自己判断について記し、その後、自主的な勉強時間が増やせない理由についてまとめる。

### 6.1 教採問題の難易度の感覚

教採問題の難易度を「難しい問題と簡単な問題が半々である」と捉えた学生は履修生全体で9名しかいなかった(第4節)が、図10右に示すようにそのうち4名が、勉強時間の上位者であった。また、そう捉える学生が平均では1.0時間勉強しているのに対して、「非常に難しい。自分の学力を超えた問題がほとんどである」と感じる学生の平均は0.79時間と約2割低い値を示した(図10左)。この結果は、問題を解く力があるほど自主勉強を行う傾向(問題を解く力がないと勉強しない傾向)を示唆する。

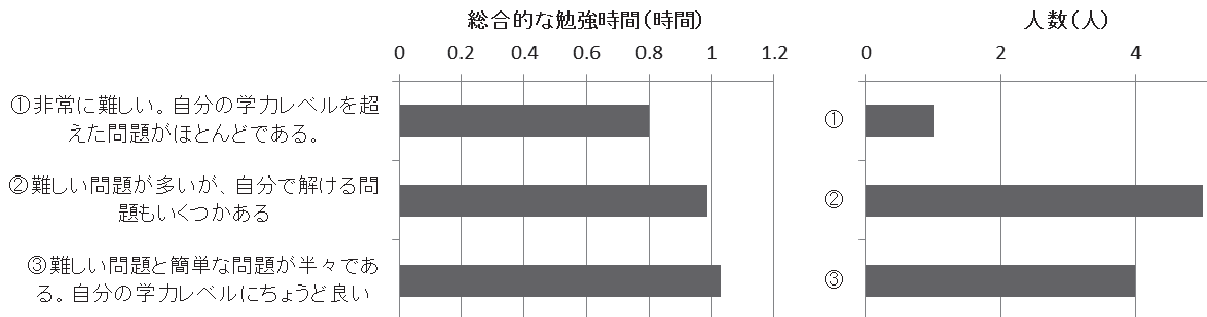


図10 難易度の感覚別の勉強時間(左)と勉強時間上位10名の分布(右)

### 6.2 高校時の家庭学習状況

図11左は、高校時の家庭学習状況別の総合的な勉強時間である。高校時に「テスト前のみをやっていた」「ほとんどしなかった」群では、現在の勉強時間も短いことが見受けられた。特に「ほとんどしなかった」群は、大学入学後もほとんど勉強しない(約0.4時間)と考えられた。また、履修者全体で「ほぼ毎日やっていた」は8名であった(第4節)が、そのうち4名は勉強時間上位10名に入っていた。これらからは、大学入学前の学習習慣が現在の自主的な勉強時間に影響する様相が示唆された。

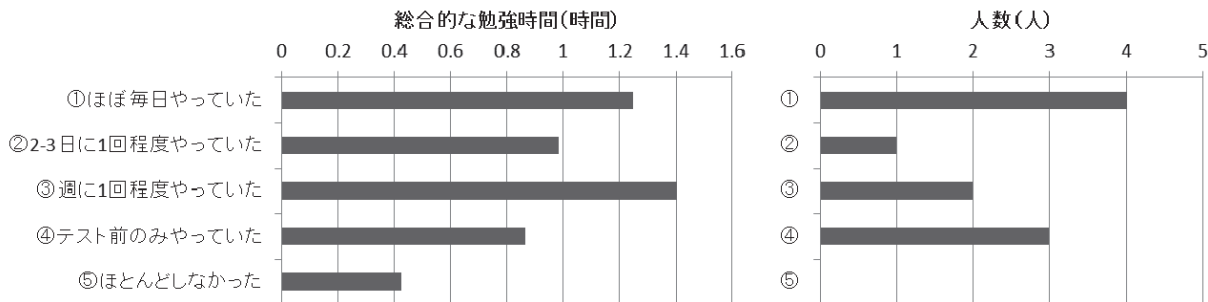


図11 高校時の家庭学習状況別の勉強時間(左)と勉強時間上位10名の分布(右)

### 6.3 学力レベルの自己判断

図12左は学力レベルの自己判断別の勉強時間であるが、自分をEランク(最下位ランク)と判断する学生は勉強時間が短い傾向(0.76時間)にあった。また、勉強時間上位10名のうち自分をEランクと判断するものは1名しかいなかった。

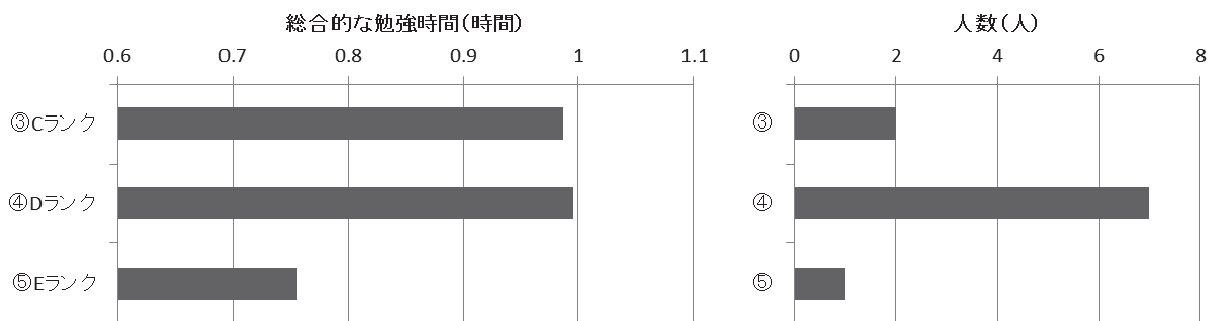


図12 学力レベルの自己判断別の勉強時間 (左) と勉強時間上位10名の分布 (右)

#### 6.4 自主的な勉強時間を増やせない理由

アンケート調査での自主勉強ができない理由 (複数回答可) としては、「忙しい」が31名で最頻であった。つづいて、「自分自身のやる気が低い」(18名)、「勉強の仕方がよくわからない」(12名)であった。「今の勉強時間で十分と考えるから」と回答したものはゼロであった。

忙しい理由を図13にまとめた。「アルバイト」、「部活動・サークル活動」が約30%の2大理由であり、続いて「他の授業の予習復習やレポート」が続いた。「遊び、友人との交流」を挙げた学生はほとんどいなかった。

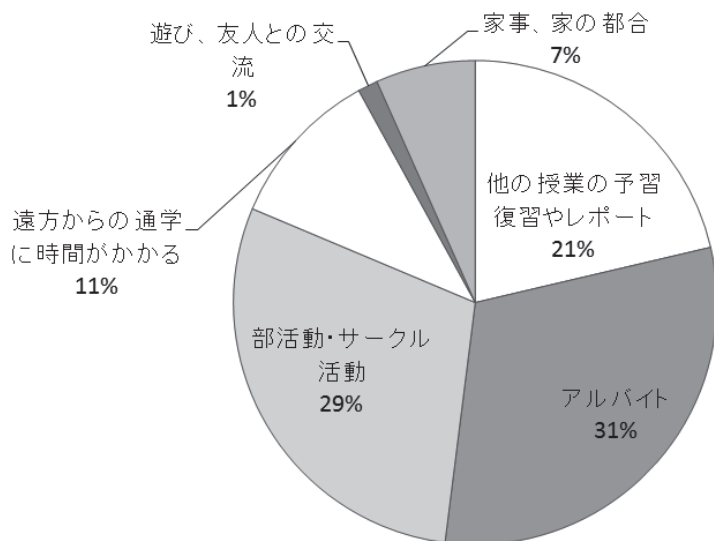


図13 自主勉強できない“忙しい”理由

## 7 ノートチェック

ここでは、各確認テスト後に提出されたノートチェックにおいて読み取れたことを定性的に記述する。

ノートチェックにおいて、予習を毎回している、時々する、行わないと判断される学生は、それぞれ15、13、15名であり、割合としては約1/3ずつであった。ただし、予習をしている学生もその実施内容は、設問のみに回答するものから分からない英単語を調べるものまで、その実施レベルはさまざまであった。

一方、「予習課題の周辺まで含めて自主的に調べ、勉強を深くすることで力がついてくる」と指示したものの、それをやった形跡のあるノートは皆無であった。わからない英単語については調べた学生についても、その他の科目では主体的に関連した知識までもを調べることは取り組めていなかった。本学部生は、現在の課題はそれだけに終始し、他の資料と付き合わせて知識を立体的にしていくことができ

ないことが考えられた。

また、問題全文を丁寧に書き写すこと（課題丸写し）を予習と考える学生が少なからずいた。それを実施する学生の生真面目な性格が予想されるが、このような学生の成績はむしろ低い方に分類され、必ずしも予習が学力向上に結びついていなかった。前段の知識を立体的にしていくことができないことと合わせて考えると、効率的な勉強の仕方がわからない背景が理解できる。

効率的な勉強の仕方という観点では、自分の学習内容や知識をノートにまとめ、ノートづくりをする（できる）学生の少なさも印象付けられた。私の事前の意図は、ノートを学生に配布することで、予習において事前課題に取り組んだ結果がまずノートに記され、授業内において私や学生仲間の問題の解法をみてそれがノートに加筆され、さらに私のより良い解答法や周辺の知識の解説を加えてノートが充実していく、というものであった。しかし、予習をしている学生であっても、正答であったらそれに○をつけることで終わってしまい、より発展的に理解を深めようとする態度は見受けられなかった。おそらく私の意図どおりにノートづくりを実施している（できる）学生は皆無であり、その雰囲気はわずかながらにも見受けられる学生でも10名に満たなかった。

第1回確認テストまでは予習を実施していたが、それ以降は予習を実施しなくなった学生が7名いた。おそらくは学期スタート時点あったやる気が徐々に失われた結果であると考えられる。

## 8 考察および所感

本報告では、授業内容の報告として自主勉強時間を増やす試み（ノート配布、ノートチェックや確認テストの実施と返却、予習課題の第1週目での明示等）とともに、本学部生の自主勉強時間の実態についてまとめた。また、自主勉強時間とテスト結果の関係性や、アンケート調査を中心にして自主勉強時間に影響する要因の検討を行った。

### ● 自主勉強時間の推移

第1回確認テストの段階では、履修生の7割強が日常的な勉強時間は0時間と答えており、多くの学生において毎日勉強するという習慣がない実態が明らかになった。本授業を通して勉強時間＝0時間と回答するものは徐々に減少した（図8左）が、定期試験前においても学生の半数で日常的な勉強時間は30分以内でしかなかった。自由記述をみても「数日に1回1－2時間勉強する」ようにはなったものの、日常的な勉強時間の確保にはつながらなかったと考えられる。本授業においていくつかの試み・工夫を行ったが、それらは十分な効果に結びつかなかったと総括する。

一方で、定期試験前日になると1時間超の勉強をする学生が過半になっていた（図8右）。このことから、自主的な勉強は定期試験前になってようやく取り組む、というスタイルが学生のなかできあがっている実態とともに、学生が一般教養に関する学力向上よりも、目前の“評価”を強く意識していることがうかがい知れる。これは、教採対策のための学力向上という教職演習の目的から考えれば本末転倒といえるだろう。

各確認テスト前日の勉強時間が、定期試験前のそれと比べて短いことは、学生の評価に対する意識の反映とも考えられる。したがって、あえて定期試験を実施せずに確認テストの評価配分を高めるという工夫も考えられよう。

今回は、定期試験の得点率に勉強時間が強くは反映されていなかった。したがって、日常的な勉強時間が反映するようなテストづくりも必要と考えられよう。この場合、授業で扱った問題そのままをテストに出すべきか、学力向上を評価するために授業で扱った問題の応用問題を出すべきかは、非常に迷うところである。教採対策の観点および日常的な勉強時間の反映（本質的な学力の反映）という意味では、

後者によるテスト作りが本来であろう。しかし本学部生の学力レベル－授業で扱った問題そのものの処理だけでも時間を要する－でそれをやると、逆効果につながる可能性も考えられる。

また、毎日こつこつと勉強する習慣をつけさせるためには、予習課題を毎日ドリルのような形式にする等の工夫が必要かもしれない。前週に問題回答の当番を決めておくと、ほぼ100%準備してくる（ただし、理解しているかは不明。友人のノートを写している場合あり）ことから、予習を毎日ドリル形式にした上で、学生のこの習性を積極的に利用すべきと考える。

### ● 自主勉強時間に影響する要因

自主勉強ができない理由（図13）としては、学生自身は「忙しい」（31名）と回答した。「忙しい」理由はアルバイトや部活動・サークル活動であった。勉強できない2番目の理由は「自分自身のやる気が低い」（18名）であったが、それに比べて「忙しい」は圧倒的多数を占めた。履修生の多くが強い教職希望を持っている（第4節）ことを考慮しても、「忙しい」ことは学生自身の感覚としては偽りないと思われる。

しかし、学力向上のためにはその忙しさの前提を踏まえたうえで自ら時間を作り勉強していくしか方法はないであろう。今回の授業は火曜5時限であったが、4時限が早く終了したようで多くの学生は4時限途中には教室にいた。しかし、その空いた10分、15分という時間を有効活用し自主勉強に取り組む学生は皆無であり、ほぼ100%スマホ使用に向かっていった。時間を作る工夫や自分自身の時間管理までも含めた学習法の指導が必要かもしれない。

その一方で、ノートチェックで散見された課題丸写しの予習法など、勉強時間のみが確保されてもそれで良しとはできないことも印象付けられた。自主勉強時間が増やせない理由として、「勉強の仕方がよくわからない」学生も12名おり（第6.4節）、多くの学生で積極的なノートづくりができない事実とあわせて、勉強の仕方からの指導が必要かもしれない。しかし、この観点においてどのような工夫が可能かについて、私自身は現時点ではまったく答えを持ち合わせない。

また、教採問題が難しいと感じる学生（図10）、自分の学力レベルが低いと認識する学生（図12）ほど勉強時間は短かった。これらの学生は、教採対策の観点では本来は他の学生以上に勉強をしなければいけないはずだが、実際には勉強しない実態が示唆された。当初は予習に取り組んでいたが、授業途中からやる気を失った7名の存在もそのことを裏付ける。おそらく、このような学生は勉強して成績が向上したという成功体験に乏しいことが想像される。予習課題を難易度別の問題設定にし、簡単な問題から取り組む等の工夫、あるいは習熟度別のクラス編成等の工夫が必要かもしれない。

今回の調査のみではデータ数が不十分だが、出身高校の学校ランクや入試種別は勉強時間に影響していなかった。しかし、高校時代に勉強する習慣がなかった学生は勉強時間が短い傾向（図11）にあり、当然ながら勉強した経験がなければ、勉強方法もわからず成功体験もないであろう。授業計画においてはこれらの学生の存在も考慮する必要はあるが、教職演習の教採対策の目的に鑑みれば、上記の習熟度別のクラス編成も含めて、教職演習としてどの学生までを対象とするかの検討も不可避であろう。

上述の点は、教職演習Ⅱの半期のみで解決できる範疇を超えた問題を多く含んでいる。教職演習Ⅰ～Ⅵ全体で連携し、より緻密な学力向上計画をたてることが教採一次合格率を高めると考える。

## 文献

- 1) 三宅醇 東海学園大で教職を目指す学生諸君へのエール－人間健康総合演習Ⅰの取り組みから－, 学部内資料, 2011.
- 2) 入試広報委員会 昨年度入試結果とその分析. 第1回入試広報委員会資料 (2015年7月1日), 2015.